

医療現場で働く看護師のヒヤリハットに影響を与える要因 (3)

— 医療事故回避につながる要因の検討 —

○ 迫田裕子¹・兵藤好美²・田中共子³

(¹岡山大学社会文化科学研究科・²岡山大学医学部保健学科・³岡山大学社会文化科学研究科)

Key words : ヒヤリハット, 職場ストレス, 看護師

目 的

兵藤・迫田・田中 (2007) においては、ヒヤリハット頻度と個人要因や環境要因の関わりを広く検討した。本研究では、ミスが発生しても事故にならずにヒヤリハットの段階で食い止められた要因として、他者からの「指摘」や「援助」が関わっているのではないかと考え、これらについて検討を行う。また、安全な行動やエラー回避につながる要因として、神園 (2001) は、「安全態度」を取り上げている。ヒヤリハット防止のための安全教育を視野に入れて事故の抑止要因を探る意味で、本研究ではヒヤリハット発生をめぐりストッパーとなった者と、看護師の安全に関する態度について検討を行う。

方 法

調査対象者: 2006年4月に得たA病院の看護師157名分のデータに加えて、2006年10月のB病院、C病院の看護師から得た366票を加え、合計523票について分析を行った。

質問紙: ヒヤリハットに関連する総合的な質問紙を構成したが、今回の分析では以下の項目を使用した。①兵藤ら (2006) が作成したヒヤリハット尺度、②職業ストレス検査 (田中・渡辺, 1998) のうちソーシャル・サポート関連項目を本研究用に修正したもの③安全に対する態度尺度 (神園, 2001) のうち黙従性と内省的傾向、安全への態度、事故観に関する項目④事故にならなかった理由 (事故につながらずにすんだ理由として、自分で気づいた場合、同僚、上司、部下、患者が気づいて指摘してくれた場合がどのくらいあるか5段階で評価)。

結 果 と 考 察

1. ストッパーとして重要な人物

事故に至らなかった理由として最も多かったのが、「自分で気づいた」である (Figure1)。次いで「同僚に指摘された」、「上司に指摘された」の順であった。自分で気づいた場合の中には、「念のために調べていて分かった」「調べ直した」「人に聞いた」といった違いがある。被験者内の1要因分散分析を行った結果、「念のために調べていて分かった」が「調べ直した」「人に聞いた」より有意に多かった。自分自身で確認する習慣が、しばしばストッパーとなっていると考えられる

2. ソーシャル・サポートとヒヤリハット

ソーシャル・サポートについて、同僚、上司、部下というサポート源別で、サポート2 (高、低) × ストレス反応 (高、低) による2要因の分散分析を行った。その結果、上司のサポートについてのみ、交互作用の有意傾向がみられた (Figure 2)。ストレス反応の主効果 ($F = 4.51, p < .05$) が有意に示され、交互作用は有意傾向 ($F = 3.01, p < .10$) であった。Bonferroni 法による下位検定の結果、上司から得るサポートが少ない群では、ストレス反応が低い場合よりもストレス反応が高い場合に、ヒヤリハットが多かった。上司からサポートを多く得ている看護師は、ヒヤリハットの回数にストレス反応の高低が影響を及ぼさないが、上司からのサポートが少ない看護師は、ストレス反応が高まることで、いつもよりヒヤリハットを起こしやすくなる傾向が見られると言える。すなわち、詳しいメカニズムは不明なものの、ストレス反応を抱えた個人にヒヤリハットの発生が多いという状況に対し、上司のサポートは何らかの意味でこの状況を緩和していると

推測される。

3. 安全態度とヒヤリハット

安全態度について、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った結果、神園 (2001) とほぼ同じ因子が抽出されたが、第四因子の「安全への配慮」の信頼性が低かったため、除外し、再度因子分析を行った。その結果、「黙従性」「内省的傾向」「事故観」因子の3因子が抽出され、以下この3因子を用いることとした。

安全態度の下位尺度として、疑問があっても黙って指示に従う態度である「黙従性」の高群、低群の間でヒヤリハットの頻度の平均を比較した。その結果、黙従性の高群は低群に比べて、ヒヤリハットの頻度が有意に高かった。安全態度の2つめの下位尺度として、事故の可能性を意識している度合いを示す「事故観」の高群と低群間で比較すると、事故観の高群は低群に比べて、ヒヤリハット頻度が有意に高かった。安全態度の3つめの下位尺度である、自分の思考や行動傾向を普段から意識している態度を意味する「内省傾向」についても高群、低群間の平均を比較したが、ヒヤリハット頻度について有意な差はみられなかった。これらの結果から、疑問に思っているでも黙って指示に従ってしまう態度が強いものは、ヒヤリハットの報告が多いと言える。また、自分も事故を起こす可能性があるとして強く意識している看護師は、ヒヤリハットの報告が多いと言える。事故に対する意識が高い者は、ヒヤリハットの気づき自体も高いのかもしれない。

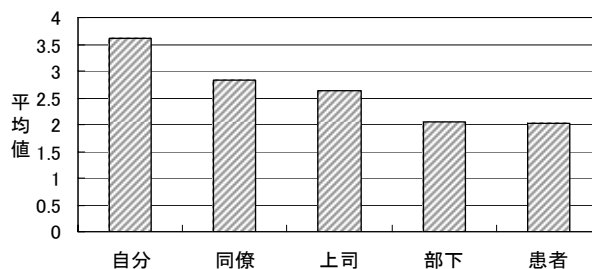


Figure1 ストッパーとなった人物

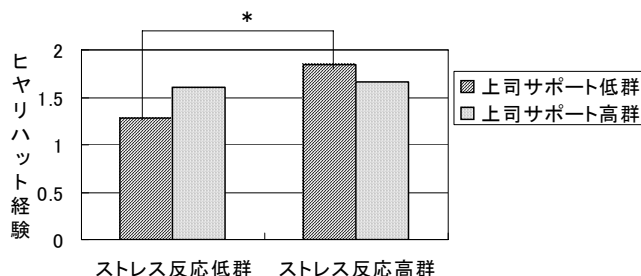


Figure2 ストレス反応と上司サポートの交互作用

引用文献

兵藤好美・迫田裕子・田中共子 2007 医療現場で働く看護師のヒヤリハットに影響を与える要因 (2) 日本心理学会第71回大会発表論文集 (SAKODA Yuko, HYODO Yoshimi, TANAKA Tomoko)